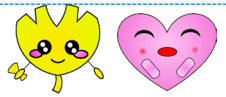
神奈川県秦野市

1.概要

【主担当部局】秦野市教育委員会 教育指導課

【主な関係部局】秦野市立末広小学校
神奈川県立秦野支援学校
神奈川県教育委員会特別支援教育課
神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進課

本事業の目的	【当該地域におけるこれまでの背景および課題】 ・本市では、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指している。 ・末広小学校校舎の一部に県立秦野支援学校知的障害教育部門小中学部が開設され、交流促進を図ってきた。 ・末広小学校と秦野支援学校で学ぶ全ての児童生徒が、互いに人格と個性を尊重し合い、理解し合いながら共に学ぶインクルーシブな学校運営モデルを確立するため、学校を取り巻く全ての人の「意識」「専門性」「環境」の向上を目指す必要が高まっている。
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・カリキュラム・マネージャーを中心とし、行事交流、日常的な交流にとどまらない、交流活動及び共同学習を実施する。 ・特別支援学校教職員の専門性を生かしながら、交流及び共同学習の在り方を見直し、全ての児童の教育活動の充実を図る。 ・現行の教員配置にこだわらず一人一人の専門性を生かした指導体制の構築と「ともに進む」教職員の意識向上を目指す。 ・こうした取り組みを市内はもとより、各地域に情報発信することで、インクルーシブな学校運営モデルの拡充につなげる。

学校運営連携校	特別支援学校	小・中・高等学校
	神奈川県立秦野支援学校末広校舎 知的障害教育部門 （児童生徒数）小：26名、中：10名 （障害種）知的障害	秦野市立末広小学校 （児童数）485名 

カリキュラム・マネージャー		
	【配置人数】 1名	【主な経歴】 特別支援学級主任 総括教諭
	【本事業における役割】 ・ 交流及び共同学習の記録を指導案として整理 ・ 学校運営連携校間の調整 ・ 文献調査、アンケート調査・観察	

連携協議会			
	【構成人数】 15名	【開催回数】 3回	【外部専門家】国立大学教員養成学部教授1名
	【連携協議会において検討・議論した主な内容】 ・ 連携協議会の部会として、研究会を位置づけ、研究を進める。 ・「自然な形で」ということを大切にしていく研究の方向性の確認。成果や課題に関して情報共有した。 ・ 両校の交流ビジョンをもとに作成。「ともに進む」を目標として定める。		

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

・現在進めている交流及び共同学習について、教育課程上の位置付けやねらい等を明確にした指導案として記録を残し、「何を」「どのように学ぶのか」について児童・生徒の発達段階や、指導内容を踏まえた指導形態・指導体制・評価方法も含めたカリキュラムの構築を進める。

実施内容

交流ビジョンと交流及び共同学習の実施内容（交流は各学年ごと）

	1年（2クラス）	2年（2クラス）	3年（3クラス）	4年（3クラス）	5年（4クラス）	6年（4クラス）	すえひろ級（5クラス）	行事等全体
キーワード	知る・慣れる 同じ場で学ぶ友達として、お互いの存在を知ろう。		触れ合う 一緒の学習をする中で、触れ合う経験をし、相手のことを知ろうという気持ちをもとう。		思いやる・関わる 一緒に学習する機会を積み重ねる中で、相手を思いやる気持ちを持って関わりを深めよう。		仲良く 一緒に学習する仲間として、仲良く過ごそう。	
末広小学校 児童目標	○支援学校の存在や名前、同じ学年の児童が学んでいることを知る。 ○同じ場で活動し、一緒に楽しい時間を過ごす。		○支援学校の児童と一緒に過ごす中で相手を知り、一緒に楽しんだり、ペースを合わせたりすることができる。		○支援学校の児童と一緒に過ごす中で相手を思いやり、尊重して関わることができる。		○小集団での合同学習を通し、友達と仲良く活動したり、役割を意識して活動したりする態度を養う。	
秦野支援学校 児童目標	○小学校の存在や名前、同じ学年の児童がいることを知る。 ○同じ場で活動することに慣れる。		○同じ場で活動する中で、相手からの働きかけを受け入れたり、積極的にかかわろうとしたりする。		○同じ場で活動する中で、相手との関わりを深めたり、集団の中で自分の役割を果たしたりする経験を積む。			
1学期	【生活】 ①②学校探検（支援学校へ行こう） ③なつがやってきた こうていで なつをさがそう 【体育】（全学年） ①②いっしょに、からだをうごかそう！ ・なかやすみ交流	【学活】 ①交通安全教室 ②としょかんへ行こう	【社会】 ①まちの様子	【理科】 ①季節と生物 【図工】 ①つけて、のばして、生まれる形 【社会】 ①ごみのゆくえ（クリーンセンター見学） ・蚕	【体育】 ①とび箱運動 ・委員会活動	・委員会活動	【生活単元】 ①野菜を育てておいしく食べよう。（居住地交流 3年・6年）	・愛鳥週間 ・音楽鑑賞会 ・合同引取訓練
2学期	【生活】 ④いきものとなかよし むしをさがそう	【生活】 ①うごく うごく わたしのおもちゃ	【社会】 ②火事からまちを守る	【理科】 ②季節と生物（夏のおわり） ③季節と生物（秋） 【総合】 ①考えよう！身近な福祉	【社会】 ①日産わくわくエコスクール	・鼓笛隊見学	【生活単元】 ②野菜を育てておいしく食べよう。（居住地交流 6年） 【生活・総合】 ①すえひろっ子アワードを作ろう。（4年・6年） ・給食交流 ・運動会練習	・夏期作品展 ・合同避難訓練 ・校内図工展 ・運動会練習見学

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

指導内容・指導方法の工夫

- 学校運営連携校間で、中休み以降の時程を揃えることで、交流及び共同学習が行いやすくなり、授業の交流から発展して、休み時間の自然な交流の場にもなるよう工夫を行って活動できた。
- 前年度のうちに、両校間の学年ごとに話し合い、交流および共同学習の年間指導計画を策定し、計画をもとに交流を実施することができた。
- カリキュラムマネージャーが指導案のひな形を作成し、交流及び共同学習の各授業の記録を指導案として残した。小学校、支援学校それぞれの「本時の目標」と「交流の目標」を定め、ねらいをもって指導を行えた。「本時の展開」に加え、「配慮事項」「留意点」「気がついたこと」を、授業の事前事後に確認し指導案に記録している。

交流及び共同学習の成果

- 実施回数が令和5年度と比較して大幅に増えた。
- 前年度に立てた年間計画に加えて、学年だけでなく委員会担当などのそれぞれのポジションで考える職員が増え、学校同士の関わりを考えるようになった。
- 末広小学校の教員から交流及び共同学習に関する提案が増加している。
  →今までの積み重ねが根付いてきている。
- 支援学校の児童は、交流及び共同学習の回数を重ねることによって、小学校での活動に見通しを持ち、参加できるようになってきた。
- 普段、小集団での活動が難しい児童も、整然と行われている授業に参加する中で、落ち着いていられる場面がみられた。
- お互いに、どうかかわってよいか分からないという存在ではなくなった。
- 末広小学校の児童からは「同じでいいじゃん」「一緒に遊びたい」という声が聞かれた。
- 現1、2年生は、入学時から支援学校との交流を行っており、一緒に授業することがあたりまえと、自然に捉えられている様子がある。

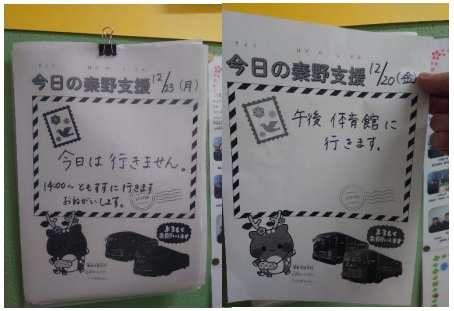
3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

・秦野支援学校末広校舎のリーダーが、毎朝末広小学校の教務主任と打ち合わせをし、当日の予定を確認している。
・末広小学校のカリキュラムマネージャーを補佐する役割として、支援教育補助員を配置し、資料の整理、カリキュラム・マネージャーが本来在籍校で担う業務のサポートを行っている。
・末広小学校の授業に参加する場合は、末広小学校の教員がメインティーチャーとして指導し、秦野支援学校の教員がサブティーチャーとして指導している。末広小学校1年生対象に行った学校探検の授業では、秦野支援学校の教員がメインティーチャーとして授業を行った。
・横浜国立大学大学院教育学研究科　渡部匡隆　教授を外部講師として招聘し、研究の方向性や、交流及び共同学習に関する指導・助言をお願いした。今まで培ってこられた「自然な形」での交流及び共同学習の背景・要因を、言語化できるとよいとアドバイスをいただいた。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

・末広小学校の4月の職員会議において、秦野支援学校末広校舎の職員が挨拶し、お互いに知り合う機会を設けた。
・8月、12月に開催された、秦野支援学校の学校運営協議会の部会「ともに進むサポーターズ部会」において、交流及び共同学習に関して、両校間で成果や課題に関して情報共有した。
・両校の管理職の柔軟性のある対応により、両校の教員は同じ学校の教員同士であるかのように、スムーズに授業に参加することが出来ている。
・両校間で、各学年の教員が直接連絡を取り合って、授業準備をすすめた。
・両校の教員が顔なじみになっており、お互いに指導の相談をし合える関係性を築いてきている。
・支援学校において、夏季休業中に期間を設け、教材教具を紹介するコーナーを設けた。末広小学校の職員の学びにつながった。
・末広小学校の体育館、多目的室、図書室、視聴覚室を、秦野支援学校の児童も使えるように調整している。



各学校運営連携校における校内体制の構築

・職員会議、学年会等でできることを出し合い、それを交流に活かしている。

教員研修の実施

・1月22日（水）校内研修会
横浜国立大学大学院教育学研究科　渡部匡隆　教授を講師として両校の教員を対象に研修会を行う。
今年度までの交流及び共同学習を振り返り「良かった点」「気になった点」,「これからに向けて」をグループワークで出し合う。
教員間のコミュニケーションの機会とするとともに、次年度に向けて課題を共有し、意識を高めてもらう。

4. 課題と展望

令和6年度事業における課題

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】
・１学期の交流及び共同学習に関しては、指導案が後付けとなったものがあった。
・職員アンケートが未実施であるため、職員の声を拾い切れていない。
・両校の児童が何を感じているか、児童の声、様子を丁寧に整理していく必要がある。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】
・両校の職員の専門性を活かし、相乗効果をあげるための手立てを講じたい。

令和7年度事業の展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】
・職員アンケートを実施し、職員の声を反映した、計画を検討していく。
・令和6年度に蓄積した指導案や記録をもとに、授業の目標達成のための手立てとして、指導形態、評価方法をさらに検討してく。
・両校の児童の声や様子を整理し、児童の意識の段階を可視化できるようにしてく。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】
・職員アンケートを実施し、職員の声を反映した、計画を検討していく。
・両校の職員の専門性を活かし、相乗効果をあげるため、校内研修の充実、特別支援学校のセンター的機能の有効活用等を検討していく。